

2023 年度文化経済学会 〈日本〉 研究大会報告

朝 倉 由 希

公立小松大学

1. 大会概要

2023年7月に、公立小松大学がホスト校となり、文化経済学会〈日本〉の研究大会を開催した。

文化経済学会〈日本〉は、1992年に発足した、文化および芸術に関する系統的な社会・経済学的研究の発展と教育の普及に資することを目的とした学会である。世界的に見ても、文化や芸術と社会・経済の関連を探求する研究領域が立ち上がったのは1960年代のことであり、比較的新しい領域である。日本においては1990年代に入り、芸術に対する公的支援の拡充や、自治体における文化行政の発展等、芸術文化を取り巻く環境が変化する中で、関心が高まり、研究分野としての確立をみた。この領域をカバーする学会の中で、本学会は最も早期に発足し、名前にある経済学のみならず、統計学、社会学、法学、行政学、政策学、建築学、芸術学等、多様な分野にわたる研究者が所属する学際的な学会である。実務者も多く所属し、研究と現場の相互交流が盛んに行われてきた。また、扱うテーマも、芸術文化や文化財などいわゆる狭義の文化から、伝統工芸、食文化、景観、地域文化、スポーツなど、多岐にわたる。

年1回の全国大会が行われており、今年度の大会は、小松市が開催地となった。学会員・理事である筆者が大会実行委員長を務め、北陸圏の学会員および本学部の教職員による実行委員会を組織し、実施した。

大会概要

テーマ：北陸の文化観光

日程：

7月8日（土）シンポジウム、特別セッション（團十郎芸術劇場うらら）

7月9日（日）学会員による研究発表、企画フォーラム（公立小松大学中央キャンパス）

7月7日（金）および9日（日）にエクスカージョン

主催：文化経済学会〈日本〉、公立小松大学

後援：石川県、小松市

いしかわ百万石文化祭 2023 応援事業

参加者数：約 200 名

2. 特別セッションとシンポジウム

大会1日目となる7月8日(土)は、團十郎芸術劇場うららを会場に、特別セッション2本とシンポジウムを開催した。シンポジウムの前にオープニングセレモニーを開催し、小松市長宮橋勝栄氏、本学学長の山本博先生、学会会長の片山泰輔先生(静岡文化芸術大学)よりご挨拶をいただいた。

① 特別セッション I 「北陸の文化観光拠点」

パネリスト

清水邦夫(福井県立一乗谷朝倉氏遺跡博物館館長)

唐澤昌宏(国立工芸館館長)

桐山登士樹(富山県美術館副館長)

モデレーター

太下義之(同志社大学)

2020年、「文化観光拠点施設を中核とした地域における文化観光の推進に関する法律(文化観光推進法)」が成立、施行された。この法律では、「文化観光」を「文化資源の観覧等を通じて文化についての理解を深めることを目的とする観光」としている。また、「文化観光拠点施設」とは、博物館、美術館、社寺、城郭等の文化施設のうち、文化についての理解を深めるための解説紹介を行い、観光関係者と連携することにより、地域における文化観光の推進の拠点となるものである。文化施設の展示の改善、VR等の最新技術を活用した体験型コンテンツの開発、施設へのアクセス向上やWi-Fi整備などの利便増進などが、取り組む内容となる。設置自治体が文化観光に取り組む計画を策定し、主務大臣(文部科学大臣・国土交通大臣)の認定を受けることで、国の支援を受けて文化観光を推進するというスキームである。現在、この法律施行を背景に、文化観光推進に取り組む博物館等が増えている。

福井県では、一乗谷朝倉氏遺跡を中核に文化観光が推進されている。2022年10月には遺跡のゲートウェイとなる新博物館がオープンした。これまでの発掘調査の成果をもとに、より効果的に来訪者に価値が伝わる展示の工夫が施されている。

また、国立工芸館は、2020年10月、政府関係機関の地方移転の政策の一環として、東京国立近代美術館工芸館が金沢市に移転しオープンしたものである。石川県の文化観光推進計画は、工芸館単館ではなく、県立美術館、石川県立歴史博物館、金沢21世紀美術館、金沢能楽美術館とともに、「兼六園周辺文化の森地域計画」として進められている。

富山県美術館は、2017年に前身の県立近代美術館から移転・新築された、20世紀以降の近現代美術作品とデザイン作品を所蔵し展示紹介する美術館である。文化観光推進の認定計画は持って

いないが、富山駅近くの多くの人が行き交う富岩運河環水公園に隣接し、周辺には水墨美術館、ガラス美術館、オーバードホールなど、複数の文化施設が集積しており、一帯が文化に親しめるエリアとなっている。

各施設は独自のテーマに特化した博物館・美術館として、その文化的な価値や魅力を発信することに力を注ぎながら、周辺施設との連携を模索していることがうかがえた。モデレーターの太下先生は冒頭に、文化観光の意義について、日本に多数ある有形・無形の文化資源の魅力が多くの人びとに伝わることで、文化の創造・発展につながることで、また、地元住民が文化資源の価値を再発見し、愛着が高まり、住民自らの発信につながる点を指摘した。さらに、体験を通じ創造性を高めることに特徴を持つクリエイティブツーリズムの概念を整理し、文化観光との共通点を指摘した。後半のディスカッションでは、文化施設が文化観光を進めるうえで、集客のみの側面にとらえる「集客至上主義」に陥ることへの問題提起がなされ、文化施設の地域社会における多様な役割を実現していくために、各施設がどのような目標を掲げるべきなのかが議論された。

② 特別セッションⅡ「北陸のフェスティバル／芸術祭」

パネリスト

内田裕規（千年未来工芸祭プロデューサー）

金田豊（利賀芸術公園園長）

山田正幸（風と緑の楽都音楽祭シニアアドバイザー）

モデレーター

高島知佐子（静岡文化芸術大学）

特別セッションⅡは、北陸3県で取り組まれている芸術祭に焦点をあて、演劇祭、音楽祭、工芸祭といった、異なるジャンルの芸術祭のそれぞれの成り立ちと現状、課題、これからの展望を議論した。

福井県越前市で開催されている「千年未来工芸祭」は、2018年に開始された比較的新しい事業である。越前市には打刃物、箆筒、和紙の産地があり、近隣市町を合わせると5種類の伝統的工芸品の産地が集積している。すでに県内外で工芸のイベントが数多くある中で、「千年続く」ことを独自のコンセプトにかかげ、次世代への継承を強く意識してプログラムを組み立てている。職人が多様な人に接し、気づきを得る機会であるとともに、若い人々がクラフトの魅力に触れる機会ともなっている。

石川県で開催されている「いしかわ・金沢 風と緑の楽都音楽祭」は、ラ・フォル・ジュルネ金沢を前身とする。コアなクラシック音楽ファンだけではなく、気軽に楽しむ聴衆を拡大するため、フランスのナント発祥のラ・フォル・ジュルネを東京と共同制作して開催していたが、9回

終了したところで、金沢発信の独自の音楽祭を新たに始めることとなった。国内外の多彩な演奏家・団体のプログラムからなり、地域に定着した音楽祭として継続開催されている。

富山県南砺市の利賀村は、演劇の聖地として知られる。利賀村と演劇の関係は、1976年に世界的な演出家鈴木忠志が劇団の拠点を移したことに始まる。建築家磯崎新の設計による野外劇場、利賀山房（合掌造りを改造した劇場）などが、利賀芸術公園として整備された。世界演劇祭は40年にわたり開催されているが、人口が減少する中、外部の関係人口の力を取り込むことは不可欠であるという。

ディスカッションでは、人材確保の難しさ、公的支援の不安定さ、資金調達の大変さなど、運営面の困難が共通する課題として挙がり、意見交換が行われた。どのジャンルであれ、芸術祭はコアなファンは一定数いるものの、敷居が高いと感じる層が多い。どのようにファンを広げるのか、開催する地域との関係作りをどのように進めるのかといったことが、芸術祭の歴史の長短を問わず共通する課題として浮かび上がった。客席からも、地域の存続と芸術祭の関係、芸術祭が地域に与える影響などについて、活発な質問やコメントが寄せられ、熱心な議論が交わされた。

③ シンポジウム「工芸の可能性と北陸連携」

パネリスト

浦淳（GO FOR KOGEI プロデューサー）

小倉久英・白榮洋和（GEMBA プロジェクト実行委員会）

新山直広（RENEW ディレクター）

能作克治（能作代表取締役会長）

モデレーター

朝倉由希（公立小松大学）

北陸は、工芸の素材となる豊かな自然資源を有するとともに、日本海に面し古来より様々な交易によって文化がもたらされた地域である。冬の雪深さは、農閑期の手仕事の発達を促した。また、特に金沢、小松、高岡においては、加賀前田藩の文化奨励が工芸の発展に与えた影響は大きい。このような風土や歴史的背景により、北陸では多種多様な工芸やものづくりが発達し、伝統に革新を重ねつつ、現在まで多くの工芸技術が継承されている。さらに2020年には国立工芸館が金沢に移転し、工芸の中心地として北陸を発信する好機にある。そこで、シンポジウムでは、北陸3県で工芸を新たな切り口で発信している4事例を紹介し、その意義と展望、そして北陸という地域を大きくとらえた連携の可能性について議論した。

最初に、本業の建築設計に加え、金沢市を拠点に文化によるまちづくりに取り組んできた浦淳氏より、GO FOR KOGEI について説明いただいた。寺社等を会場にアーティストが工芸の技法

を取り入れた作品を展示し、工芸の新たなあり方を問う挑戦的な事業を、北陸3県にまたがり展開している。本年度は富山市のみの開催となったが、「工芸の北陸」として発信していきたいというコンセプトは当初より変わらず据えられている。

福井県の鯖江市、越前市、越前町は、漆器、和紙、打刃物など7種もの伝統産業産地が集積する、全国でも稀有なエリアである。ここで開催されているオープンファクトリーイベントがRENEWである。来訪者と職人が直接コミュニケーションをとることで職人の意識は変化し、この10年で34店ものファクトリーショップがオープンしているという。また、工芸やデザインに関わる人や、地域の魅力に惹かれる若者などが移り住むようになっており、移住者増加という効果にもつながっている。

地元小松市で開催されているGEMBAプロジェクトは、RENEWと同じ形態のオープンファクトリーイベントであるが、九谷焼から、メーカー、サプライヤーなど、ものづくり産業の集積する小松市らしく、多岐にわたる事業者が参加している。2023年で3年目を迎え、来春の北陸新幹線延伸を前に、小松市は産業観光により本格的に取り組む姿勢を見せている。

富山県高岡市にある能作株式会社は、高岡400年の鋳物技術を受け継ぎながら、現代のライフスタイルにあった自社製品の製造にシフトし、体験の提供としての産業観光へと展開してきた。工場見学を積極的に推進してきた背景には、鋳物が高岡の伝統工芸であるにも関わらず、職人の仕事が蔑ろにされることへの悔しさがあったという。今では、工場には月1万人ほどの見学者が訪れ、来訪者を富山全体の観光地にいざなう仕掛けも設けるなど、産業観光拠点として一企業を超えた存在感を放っている。

一口に工芸といっても美術工芸と産業工芸のように様々な方向性があるが、北陸には多様な工芸が豊富に存在している。GO FOR KOGEIは、美術工芸そのものを発信することともまた異なり、工芸をこれまでの枠組みから解き放ち、アートの視点から再解釈するとともに、地域の文化や風土へのまなざしも呼び起こそうとする試みである。他の3事例は、工芸やものづくりを産業として存続させ、発展させようという方向性をより強く持っている。工房・工場を開き、直接ユーザーと対話することは、職人のやる気や誇りの醸成、下請けから脱却し自ら製品を作る意識への変化をもたらすことが共通して語られた。

一方で、伝統工芸の産業としての存続は、需要の低下や後継者不足など厳しい状況が続く。工芸を支える材料不足や素材を作る産業の危機も深刻である。オープンファクトリーやアートとの連携、産業観光の取組が、そのような工芸の危機を救うことに繋がっていくのか、引き続き各現場での実態把握と議論が必要である。

シンポジウムを通じて、北陸の自然、歴史、文化に根差した多様な工芸と多層的なアプローチが存在することを、再認識することができた。より面的な広がりを持って「工芸の北陸」を発信していくためにも、民間同士の柔軟な連携とそれを支える行政の存在、また縦割りを超えた地域連携の重要性が確認された。今回のシンポジウムが北陸連携をさらに推進する一歩となることを

願っている。

3. 研究発表（分科会）

大会2日目となる7月9日（日）は、公立小松大学中央キャンパスを会場に、20本の研究発表と2本の企画セッションが開催された。

分科会のテーマは以下の通りである。

- スポーツとレガシー
- アートとボランティア
- 地域と芸術活動
- 関係性としてのアート
- デジタル&クリエイティブ産業の未来
- 文化政策再考
- 文化的景観の価値
- 文化としての食

分科会のタイトルから、学会のカバーする研究テーマや手法が多岐にわたることを感じていただけのではないだろうか。文化そのものの定義が難しいことに加え、現代社会において文化に求められる役割が多様化していることも、研究テーマの幅広さと多様性に反映されている。

なお、分科会「関係性としてのアート」では本学の横川善正副学長に、「文化としての食」では清剛治准教授に、討論者としてコメントをいただいた。

企画セッション（会員の提案により行われる調査研究活動のディスカッション企画）としては、以下の2本が実施された。

- 文化GDPの推計と活用について
- 文化統計の体系化に関する調査・研究

4. エクスカーション

大会前日の7月7日（金）と、2日目の9日（日）の全プログラム終了後に、エクスカーションを開催した。以下の4種類のプログラムを用意し、延べ42名の学会員が参加した。

- ① 小松九谷と石文化めぐり
- ② 小松市立錦窯展示館見学
- ③ 料亭小六庵での食事
- ④ こまつ町家めぐり

大会テーマ「北陸の文化観光」を具現化するべく、小松の石資源に由来する多様な石文化や、前田利常の産業・文化奨励から連なる歴史文化資源をプログラムに盛り込んだ。小松の文化資源の豊富さと奥深さを、参加者の誰もが驚きを持って受け止めておられた。

なおエクスカージョンの企画、実施にあたっては、小松市より多大なご協力をいただいた。①のコースでは小松市にご提供いただいたバスを使用した。また、②錦窯展示館の見学や、③小六庵の食事に際しての九谷焼の器のアレンジは、小松市立博物館にたいへんお世話になった。④こまつ町家めぐりは、小松観光ボランティアガイドの会「ようこそ」の石黒有生氏、関戸昌郎氏に丁寧にご案内いただき、大会を締めくくるにふさわしいエクスカージョンとなった。

5. さいごに

多くの学会に共通することであると思うが、2020年からの新型コロナウイルスのパンデミックにより、研究大会はオンラインに切り替わり、対面での研究交流が行われにくくなった。文化経済学会〈日本〉も、2020年と2021年はオンライン開催となり、2022年は東京で3年ぶりの対面開催となったものの、懇親会やエクスカージョンは実施されなかった。今回の2023年度大会は、対面開催で、懇親会、エクスカージョンも含めて実施することができた。本学会としては例年よりも多い、約200名の方にご参加いただくことができ、たいへん充実した大会であったとの声も多くいただいている。やはり対面で活発な議論が交わされ、研究者の交流が行われることの意義は大きく、その場を提供できたことを喜ばしく思う。

研究大会の受け入れと実施にあたってご支援、ご協力いただいた関係者の皆様に、深く感謝申し上げます。また、学会準備から当日運営まで、約20名の学生が共に汗を流した。学生たちの堂々とした姿に救われた。また彼らにとっても大きな学びの場になったことと思う。